ちらし画教急

一笑

仙鶴壽逾未過高人

更看揚琴瑟唱來

老直有秋鹿君

也应步曲舞

硯水翁七十壽題

獻

靜語

破水大人を祝ふて
七十ハまつの
たえの二葉ニて
まのちとせを
まつそ久しき

ら花 尋

新橋
卿書仙
長壽之

施の枝集

洛の破水翁古稀の祝筵を
孤松園にひらかるゝを寿く

此松のこゝろにまかぬ影ゝ多　桐窓
あやからん千人喜妙の花のゆる　掌山
七重八重り先ひろまりゆくかな　冢彰
七草や光ゝのひる日の光り　芝園
梅さられ睦てめてゝさき影られ　静居
ゆやしのらん花に月出交としの陵　喬鳥

としくに匂ひまさりぬ庵の梅　松茁

百筋も流れよるらん春の水　丹英

七種そ千代のためしのはやしかな　梅下

枝ふりもまれれ庭木や梅の花　喜水

右玉浦社友祝吟

百まてハ孫つまや後まつかな　備后三原　多賀

さくまてのゆかしさけハ梅の花　湖石

いつ迄もかはらぬ松のすかた哉　菊阜

負をとる梅も都の縁かな　甲山　完良

ゆきかたれとき柳の日勝哉　紫凬

くもりなき君のすかたやうめ柳　先穎

たらの野都の空を授ひかり　可月

末永く流れてことしうめ　含桂

かくのひる柳まれなるしるへかな　上下　扶桑

七福のひく藝つやまその風　家荻

十かへりの松千年ふし年の暮　広原　舟順

ひらくともつまぬやいきの二見貝　、霍令

徒年句に来ふりやうめのそれ　、羽雪

まためそ咲さへられるちとり　（西条）竹等

いくとしも同しけしや月と梅　、東池

ふくまめ去年よりまさる匂ひかな　、梅雨

万才やいく変してもいかぬ岳　、巨友

とし経てもかはらぬ梅の匂ひかな　、青柳

若木にもおとらぬ梅の薫りかな　、松風

見あくれは常し高し雪の不二　、頑矢

老て尚ちからこもるや筆はしめ　、梅暁

まも満ちても至る梅のさかり哉　、采湖

しくれ行中に際立つ松一木　（フク山）学楽

黄鳥の老て常よし声のはり　、蘇隠

ときかはらも栄る老の色もなれ　、松屋

玉菊の数のかりなき敬かな　、暁村

おもしろやはるとしてそて摘若菜　（アキ二方）卜亮

恵方の去年赤らむ枝ゝや、　梅芽

緋ゆかりと又屑めらきん梅の主、　池雄

宿の小松ハふ又曳さくられけり　狐棟

いく世も茎り間し尾のうめ　（旨鳴）杏裡

いく千代の節も重ねて竹とし竹　（椿つきや）佳渕

右各祝吟前文略

自賀

突杖もこまて越ぬ世の山　碩水

未だのしき正月の旅　喜水

のりる日は日新のよきに窮陽て　桐富

門の挿餘に息りをれし　鷲新

登らを風むつまし乾大京内　靜石

志ゝろい寧筍のさうりとよき　松亭

立待も居待も無る風天気かれ　梅下

さよし白ふ生束年乃稲　喬鳥

手代して荷集まる里の秋　左て
碌翫味噌ハ名さへあつし　可柳
らうそくと嫁を貰ふて業平家　常山
きつはしぬ奴氷の香やう　芝室
夜らまちるゝて役者の来る噂き　太良
時候もよろし卯月中頃　木和
度〻子とる小僧の町こ呈る所　旦霧
道途おくりてゆるつれし　梅郷

いさ宵といふて孫らる宙影のさし　丹英
まくらもちのくきうく寸ワ　彩
雨化窓ハ秋の寒さも肘にかけ　高
盆ハ茶碗をのせる糸立　園
きのふ乃ふるまひの花ハ咲揃ひ　石
音味やうのひし狗活の夏とる　析
夬先ハところもたつむ旅ひろ　山
譲りの下着つまむ膝ゆけ　和

隣結れ人めきしのふ計料く　頑
粉咋しもれ家の明らさ　喜
此建了竹山もなき三上山　富
出く葉て雲のきる道き　鳥
扇よりとぎひ勝負ならちハ之　英
返役ねられ叶ふられさ　喜
年寄て髪の黒みも不釣合　羽
酒くさのなひ医者の麦よき　柳
隣同士ひとつの蔵を便りまて　富
普請の届く金比羅の宮　彩
月きよく八十分毛も志らうし　柳
ち川乃つゝる秋の静まり　鳥
写手餅きるも彼岸の施しよ　英
客の印立すれ表つくする　柳
結納の仕切とゝける京見物　秋
案外あつく海し　和産　鳥

冬牡丹たゞ一鉢をもてはやし　彩

十婦ならぬ節ところゝゝ　富

何ゆゑをしても壊さぬ天赦日　英

月に出るとて舟を急寺　山

庭下の自像をまもる大鎧　柳

くらしよい所と思さ許ぬ　富

久しぶり越後の兄のおとづれて　園

流り羽織のちるゝあり　甚

花さへも定む寿命に句ふらん　（東都雪衣）木和

跡を一めんに草の荒さら　執筆

右五十員　玉浦社友

碩水宗匠の古稀を
祝しまゐらせて　梧翁

七種に風もさはらぬ廣師弘　梧翁

彩の好くさま開く栄の戸　碩水

常しまり餅かんに数へりて　芾棠

足軽組の去川む門職　　笠游
待宵も夜ふかくてまゐる世子の月　　如水
新酒の出来の中一分なき　　竹不
子を連てくる冬の芝紙よし　　頓
口ふ余りは寄のこ縁孔　　雀
さむやれは人もさらやく里れまう　　棠
兔の衣を袖よつむ恒さし　　和
帰のそふは何日の雪まやら修まり　　笠

布とまれ河月さ山の端　　雀
家つくりも変れふひの庵めまて　　如
かりのあき舟宿の家　　棠
たしれの咲ふ雪百まね水綺り　　不
冬舟のうもふ荷物包まぬ　　雀
咲はしきりて代理ぬらんもむま松　　頓
去ろのまへ干哉ふ来さ紀　　執筆

右西傍田房町社友

自悦

つく杖もわすれてこし妹夫の山　孤舟
星もたしに珠るも川堂　采朋
海士か家も人参居藤や波ぬらん　桜鶴
出汐ころの暁き砂まち　松風
のひあかりしころ月のたれ　竹等
露にあつかりしめる探蓬　巨友
少納言中に取まく和禁して　可乃
奈良の墨屋のかゝや来るは　青楊
思ふことはれハ住うも自に付ん　郡里
やきもち腰をくやむ湯上り　梅鏡
入札の寺蔵ても役を辞退して　挙青
宮いところに月そつしら螢　白猿
月よみくすしき楼をとり戻り　東池
言思昔衣の脱きかりよき　記球
大難れ十家難き魚問屋　蒲斎

角力をやめて風呂やわかる　梅色

年を經し一木の花や旅かしく　芸狸

まさに衣くよハ柿乳口の餅　砥笑

古同　西城町　社友

播磨

無のそのぬれて晴たり麦の色　別フ　木廓

黄鳥の老声もきしや舟上り　ゝ　掬月

山みちや麦藁ひとり黄昏る　赤穂　笠雄

年寄や客も主も稍あくび　ゝ　義梅

行雲にしきみを乃り非の藤　ゝ　花月

もつれ竿の葉先に蝶とまり　ゝ　長山

まつとはかりしれぬ家や帰るむ　ゝ　藤雪

吹あれしあとの日和や津島祭　ゝ　梅裳

かくまでて忘るゝても所の葉の緑　ゝ　清右

白浪や江も有明て鴨の声　ゝ　梅節

汲あらし井の水ぬるし白牡丹　ゝ　慶外

備前

た声の水に落こもしけりな　（西大路）涼岱

けふまつの人に杉まて露ありや　帆影

ミしらぬの雨に浮ひて月上り　世香

村雨も雲に成りぬ中宅のかせ　芦風

しくるゝや捨し日る姥の息ひ　貝石

五月雨や鳥も鳴かぬ幸千里　天籟

名になる葉もと一ツ盛なる牡丹かな　木琚

た声に落つく時きりかな　涼く

家毎に待つ人手拭や菊葉の湯　（岡山）松秀

西備

門松や稲もしつく秋の朝　（尾道）松菊

一ツ来て鳴夜なりけり和らら寺　松衣女

おもやうに西風吹やとしの花　梅卿

つま居て人待日なり雨のきし　雨柳

永き日や何を思ふて鳴く鵆　太古

着ての行て面も脱ぬ田植かれ　　、左乙
ふり足らぬ雨に伸るやことし竹　　、可咲
和暖や風も吹しき春日より　　、李蹊
庭まつるハうしろへ市の守好きかな　　三京　梅園
名露に日ん取のこゑてきゝの声　　上下　青我
鶯や木偶店の戸のいつゝ　　カミタ　可笑
畑うちのこゑ飛る雷の高根かな　　甲山　竹韻
奥ふかく見通す宿や梅ヶ香る　　、旭山

しらつゆの落て消るや石の上　　赤川　梅朗
菅井の露淋さしき旅路かな　　、種女
挿入て客待ことの大鉢かな　　甲房　芊棠
山さとの人うらやまし和かもち　　、竹和
梢より里下る雲や爽のあき　　、笠海
手ありしハ思ひけ身しらせ月　　、如水
まさき落る所きもこと赤椿　　西条　起蝶
指縁なくむしろ敷たり花のかけ　　、梅鶯

安藝

寒月もとゝかぬ和や水仙花、（本々）甚木
入らぬものをつゐ買や年の市、蝶瓢
鶯や寺影ほそしこゝに竹、春渚
たつ年や出るつともの花相撲、（竹原）霞庵
紅梅や明日も日和の風まかる、（セトタ）快之
寒ゝ梅の咲きを見けり宝月、松江
志つかさの海手はまりて乃ほの春、杏村
門松や立てられハ見なよ、奇園
庭石のすそしられて雪見哉、竹下
火のおえいこる揃て二日灸、木鳥
瓦山のうへ平志かれて秋の月、陳年

讃岐

柴うりの眼張るや山の雪、（小豆嶋）雪居
白はちりを先負いしめや大根引、芦水
頁まゝる子も夜をとら仿すねんね、梅雪

川原へ行つく坂を小さるかな　在水

舟宿のまて都ふるき麻地酒　霧山

月さして新をうくるちとりかな　可涼

香を待なまきし　新任す　秋起

雪とけのすれゝるや脊戸の山　辰年

伊豫

かと松や三日月見るによい庇　（ハシ濱）如洋

あつと鳥の來るや障子に梅のかん　指月

見て居れハ人も来てゐる枝梅かな　青陂

いさよひ月や庭木をたとる鷺の聲　森雪

よき雨のしつまくる牡丹かな　萁均

さし入る旭に日かふやつのほり　鼎

あさいふ日もさほ寺新藁かな　（今治）半亜

新そけや高い好のる惟家　桂子

咲くそろとぬき薬の園まれゝる　英甫

おしめつま色をるつゝしむ照量　松圃

またゝくや縫ふて居て眼の冴る　桜井 蘆岬
も待や雪なき山もめてつゝる　西条 大蓼
うたゝ寐の小寒き夜のはつしくれ　梅蓼
ちく染や紅して通るかれの色　アワ山 樊圃
花屑の川来るや佛生会　星凌
旅人の来て灯をとゝす河原かな　一和

丹波 丹後 但馬

家まじき明て家紡新樹かな　ワタ山 ますめ

篠一抱来て花挿する新樹かな　イサ 篠雄
牡丹見や中苑の咄しも一笑ひ　湯村 一渓
風炉先の画を明れハ帰り了　夏山
子供まてとも覗きし奴和尚よゑ　宮津 梅渓
御用荷も裏こもりや年の暮　玉水
つぶつれし袷襲する峠かな　甫来
狙抜て尾鰭の余る鰻かな　タゝ 湛竹
雪のりや下女相めくる飯の出来　カモチ 柳之

因幡

折とり人こそ色のはしる山　鳥取　樹平

志つかに山をはなるゝ后の月　盤山

そこ爰といふ声ともなし土筆　さゝ人

引波を又ましる磯辺の雪解かな　稲英

その庭や松一本そよしとし　巴大

春なれや山は砂にうつり　宗旭

ふる音とも障子にきこゆ也春の雪　素后

大井川まさしそおるすはかりけり　学光

松杉に境内ひらけしね冬も　司乙

村さめや煙るとんとの仕舞くち　琦月

燃さすに松の間てあるおぼろかな　可然

志つかなり水のふえきそろふなり　西岱

雪よりも白い李やうめの雪　宗和

静かなや木立の中も梅の花　青城

年々の浜寺袖の渡りの十あまり　應波

ちり落や先一年のこゝろよせ　依川
むしのねをきゝつねるや別れしま　義呂
山里や二日拵手もと唐重　亨芳
不許来女人も来るゝ松のうち　荷山
早寐る片側町や冬の月　みのり
元日や海を切ゝのふしの山　一樹
初秋や先このわり秋のはしき　素竹
まつ明や揃ゝて晴し雨の詣　天奇

伯耆　出雲

立よけて落つく橋や初しくれ　アハシヤ　効家
菖蒲や先おちつきし跳走り　米子　其人
咲てある牡丹や一人様をしゝ　梅暦
未し落るいろもえぬ梅かれ　橘儔
名月やのそゝ通りの松のうく　サカエ　孝子
川口や春待舟のむつましき　ハタリ　亀友
幾日のかゝく日和や梅のほる　柳青

水僊や育もしらぬ垣隣　（赤崎）弓束

大仙にて
待宵や木蘭着たる山法師　（淀江）霞外

諸〻の咄し持よる納涼哉　（大方）可龍

綿畑や月も砂の中にまて　（新田）清雅

煎茶にハちとつよゐる清水哉　（中ツ）玄珠

こぼれ花のちりも名残や萩の色　（松江）曲川

川端ゆく人のくるまする哉　前路

於小川氏興行

蓬莱の青海原や新たまる　桐富

銅莢寫の完字年　碩水

招きしの沙をる雨へ出代りす　木和

音信もされ乳勝るゝ多り　富

前まで及りしのされ月の後　水

霧きらつまり松を伝ふ　和

加ふ立ち薬店に業の流りまて　富

ものゝ筆よき女子も人　水
紐解する孫のこゝんの草双紙　和
まくら屏風もあさいらぬ冬　高
麦蒔き跡のしめりを祈る哉　水
鍋汁して寄らんやくそく　和
和月杖案外かたの志川らと　高
本町すちの盆の寺麁き　水
鬼灯の苞なとさけて婆ゝのり　和
家へまいりて見きは知り人　高
はくもしはほら猪蔵すまやは　水
塔の日ゝけを退て乱隙　和
いつそやの書和舎もとらまて　仝
勝と思ふて碁に負となる　高
はちらかふ投て掛乞きさのり　水
まちの来るのを家来脇より　和
生壁の乾くをいそく火を焚て　高

亨以核手鳥雨川まる　ゑ

そこの恋ハまろい炭伏よなゝ如き紀　和

娘乃色ハ夢の写手ミ川　高

高角に同し呉服の流行店　ゑ

打水汲の拐ちま遠ふ　和

雲ひとつなくて涼しき夢の月　高

餘まくら手かまる振わち　ゑ

用事ミ乳組合寺乎教ゑおき　和

勝負も火稗きれし未刻色　高

洗濯も稀れ白和手たくまて　ゑ

たんと灰まきし雪の落如画　和

今も尚ろるほしいある志奥のむ　高

古風手稽ふ曲水の友　ゑ

近江　伊賀　伊勢

粉朱の花見や河のあるゝまり

粟津
蟻洞

○

賣なられて出けり祇園會 八幡 其玉

新まちる走に冷さし鉢さかり 大津 春山

あまれや出けりに添ふて鳴雀 大分 虚栗

子供等ら鹿ミものよ萩枝 上野 養瓜

明る戸に添ふてきし込初らみ、 春斐

初東風や去年の行末もゝ女門、 逸史

山里の人等罪なき初松魚 山田 霍渚

尾張

○

弓はしめ芋殿もこのまゝ素見られ ナコヤ 流琴

鉢毎のしつくや行きすゝれみ、 義岳

引汐につれてもゆられ荻の声、 素溪

色添ふてふるゝ雪や庭の松、 羽洲

駿河 遠江 三河

梅手折おなし花のちらぬ葉 吉田 蓬宇

来そとて為もり義に添れけり 見付 杜水

もろ声も暮らしさやまつの風 塩井 嵐牛

引のこる蝶ハ尾ちらつ游ひけり　（フタ）春台

夕ぐれや笹栗落る板ひさし　（シマタ）清節

武蔵

春つけのまゝも揃て落椿　（横ハマ）翠兄

ちひの字の男んと定まる牡丹哉　（東京）春湖

妻ふきの太鼓しきまありぬ落月夜　、默平

つむ雪やまさ用意なき人通り　、完路

出つけて草外出ほ孫生かな　、莱兄

蝶ハこれ風にとられて沖鵆　、是三

月秋や庵もつ人まねの仕る　、梅年

さらしと茶耳に呼や世の声　、三水

やうきや引風ニ流も引き沈　、東枝

すゞ風もはつくむまを添し屋　、蓀径

山ひとつゆる家形し冬木立　、壺公

吹入るやこゝ気候の採り　、寄栽

まの字詩ふむよ形くまろ見　、為山

加賀

明ての日衣やもるかずに貌　金沢　重鶴

芦の葉のすゝきてみての月、　希云

菊代や古き流れの有あまり、　眠考

まされ袖すゝのものゝや夕嵐、　古只

昔形の古の扇らし五月雨、　西巷

くもり形に月をゆさんや時鳥、　梅呂

外のこすたこのそよ紅や麻の風、　雄巴

雨はれて竹さく露の葉の月、　甫立

手のふまいかへりて鶯や石蕗の花、　李阜

冬られや俵まつる艶屑　宮越　時栽

和きよ思ひ風かへりけり　金沢　晴江

春ゝりの啼く止まりに昔あやめ　小松　呼洞

ゆふ鐘の形日鼻味よしきし色、　誉流

元日やきよ紀住居もるの足る、　白頏

李アの名てよ名ゆふ乃やくれの雪、　直月

うきことおるものとはきえん桐の花、　重猶

すゝきの花見多しとしのくれ、　岳尤

ての月すれ寺来るや琵琶笠、　松吹

戻る雁義更行とあるや鯨より、　李邑

やぶ入はつれてまゐるや侍の子、　不鱗

能登

戸のすきま明りのさして初霧　ハシヤ　妨屋

夕くれは鳥を並へて鯨の茶　寺ロ　壽有

藁のあひのこわたる月とは萩の庵　トキ　亀声

稲つると方のきらんや秋日より　西院　鳳兮

越前

水もまて蒼の数や市の梅　ツルカ　菊堂

つき出して桜折る小舟かな、　花渓

小川とくる白さしり数雪のあめ、　宿樊

青吹て馬から下りるしぐれかな、　瓢水

ゆの字の奴誌するや菰下戸　マルヲカ　舟暁

二階にも見ゝあり蕣の花　九思　東林

遊歴

月すむや実を成遂し稲のうへ　条翁

初雪の曉や野よりも坪の内　犂春

夷をしまふてこゝろたよりや松の声　虚貫

碩水翁の古稀を祝して

はやうらん年を上寿やわかの友　木和

松に杖つかせて君ハ翁ぶり　長門　古樵

おのしと葬たくや頃の月　九十六　松堅

いなつまの侍そゝや夜這むし　九十一　良徳

樹の木にまつられ葵のもとかり　八十九　宗鑑

り人のあるをしまるも踊れ　八十九　梅盛

小侍筥ハ猿のおとしや棒をする　八十八　舊國

秋の日のいらし気しやいとも　八十七　貞興

御様した見てまいるやいとまこれ　八十六　寸風

山里ハ宵からえてねとの恋　八十五　多年女

吹やむに波さわかるちとりかな　八十四　鳳朗

乃ゝも清くなみて来てゆかし山　八十四　蒼虬

地に落て掘むにくゝき隠るゝに　八十四　悠々

明と秋ハ元之さまにちる桜　八十四　梅室

ふ雲のつゝ見はなり不二の山　八十三　一枝

おこそかに咲て昇りし葵に　八十三　才麿

かさねても見て居ても出よ秋半の月　八十三　貞徳

秋の日の見えるまゝくれて月秋む　八十三　八千房

鶯に隙ありてや苔のうへ　八十三　一学

雪月も一度にみする卯月に　八十三　聖一

世にふるもさらに時雨のやとりかな　八十三　宗祇

嬉しさて孫に取伽の炭火かな　八十一　乾堂

衣かへ十日早くハまひ清ゝのう　八十一　野坡

その下の落るハ風のおこりかな　八十　玄札

永ゝ日や其日しのぎの雨来　八十　杉風

右長寿の古人を爰に出す

鶯なりてり人もあり和子の白　拾山

めて度は開く日に咲く福寿草　良大

夕萩やかれ静まれは月の夢　文海

埋火や明る夜遠きひとり言　鷺池

畑の木もやふ木も梅の小里哉　芹舎

上加茂に詣して

元日や世のちり拂ふ水煙り　碩水

甲戌の春日

新橋渉郷

明治七年　甲戌

頃る安永と思ひし山尾ミ子を源
ニ備ゑてさし扨當年吉樽の牛小葉和信
故ニ折りこ青岩居ゟ剞上して當座るべき
ちと待ちし旦し雅言

戌正月

打さ枝さきて香ゝや梅ならひ　　弥水

吉備の山中吹笛と云知らぬ山々をも尋ねて此山かくるに

老くれし庵主の春や子杉

漸くきこゆる雲の間をおくれて一四葉

当りて来りて余りが借りしかな

随意得志竹紀

文音添

東京（深川仲住吉所）小林芝尾
西京（此条東洞院東入）大竹園
備后（尾ノ道久保町）葛西喜水
大坂（大川町）尾道屋弥助